

マリン周辺の一步先を読む

なるほどINSIDE

[第13回]

青木 洋さんが取り組むヨット指導方法



団塊の世代の受講生が多い青木ヨットスクールでの海上トレーニング風景

「ヨットのベテランが必ずしも良い先生とは限らない」。そんなアンチテーゼを掲げ、受講生の心理にまで踏み込んだカリキュラムを導入し、ヨットの普及に努めているのが、青木ヨットスクールだ。世界一周を成し遂げた青木洋さんが取り組む、インストラクターの指導技術に目を向けた独自の手法とは。従来の指導方法に一石を投じる、ユニークな試みを探った。

文・写真=桑名幸一

ある縁が教える喜びを培い、アメリカで専門教育を受ける

かつてヨットの入門艇としてディンギーが活躍し、初心者向けのヨットスクールが各地で活動していた。基本操作を身に付け、スクールを卒業すると、自分のディンギーを購入し、実践を重ねてさらに技術と知識を向上させていく。このような流れのなかで、ディンギーの愛好者人口は伸びていった。

ところが、最近ではヨットスクールの数がめっきり減少し、かつての勢いはなくなりました。それに呼応するように、ディンギーの販売隻数は低迷を続け、町なかにあったマリンショップも姿を消

して久しい。愛好者人口が減少したからディンギーが衰退したのか、ディンギーの販売低迷が愛好者人口の頭打ちを招いたのか。悪循環は断ち切れないでいる。

カタマラン艇が集まるヨットクラブを経営する鎌倉の古い知り合いから年明けに連絡もらったが、「乗っているメンバーは、当時の30代がそのまま年を取り、みんなオジサンになっていくよ」と電話口で苦笑していた。その本人も還暦を迎えたと聞き及び、ひとごとながら、この20年を振り返らざるを得なかった。

そのような状況のなか、独自のカリキュラムと考え方を取り入れたスクールを

開き、受講生を増やしているのが、関西国際空港の対岸に位置する田尻漁港(大阪府泉南郡田尻町)を拠点に活動する青木ヨットスクールだ。校長は、1971年から3年2カ月にわたり、長さ6.4メートルの自作ヨット(信天翁二世号)で世界一周を成し遂げ、最小ヨットの記録としてギネスブックに掲載された青木洋さん(57歳)である。

ヨットによる単独世界一周航海という偉業を成し遂げた青木さんが、なぜヨットスクールに身を投じたのか。このような記録を打ち立てると、人間は慢心しがちになり、他人のことにあまり関心を寄せなくなるものだ。しかも初心者への指導となると、自分の経験との落差が大きすぎて、教えるのが厄介になるのではないだろうか。

きっかけとなったのは、一人の人間との出会いだ。13年前、大阪府泉大津市でヨットの販売、整備を行っていた青木さんのもとに、斉藤 寿さんという人物が突然、ヨットの教えるを請いに訪ねてきた。聞けば、ヨットで日本一周を目指しているという。しかし、斉藤さんは当時63歳で、末期がんで、心臓にペースメーカーを埋め込み、口も目も不自由な状態だった。青木さんは、どのように教えていいのかわからず一度は断ったものの、奥さんの話を聞いてみたいと、名古屋の斉藤さん宅を後日訪ねた。すると、「主人の最後の願いを聞いてほしい」と懇願され、迷いを捨てて、引き受けることになった。といっても、健常者に教えるようにはいかない。そこで青木さんは、独自のプログラムを作り、それをカードに書いて、筆談でコミュニケーションをとるように努めた。